

漢字学習に対する意識と学習ストラテジー に関する一考察

—ラトビア大学を例に—

田村知佳（ラトビア大学）
chika.tamura@gmail.com

【要約】

本研究では、オンラインから対面式への授業へと切り替えを経験した学習者の漢字学習に対する意識と学習ストラテジーについて調べる事を目的とし、ラトビア大学にて日本語を専攻している学生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、デジタル・ツールがあっても、漢字学習の必要性を感じていること、また評価基準から学習ストラテジーでは反復練習が多く選択されていた事に対し、試験対策が影響している可能性を指摘した。

1. はじめに

非漢字圏の漢字学習ストラテジーに関する調査は、すでに多く様々な国で実施され、まだ「繰り返し書く」などの特定の学習ストラテジーが多用されている事が確認されているが（例：大北 1995, ウラムバヤル 2005）、古くから研究されている事もあり、デジタル・ツールの使用など最新の状況を踏まえたものは、まだまだ見られない。そこで、本研究ではラトビア大学にて改めて漢字学習に対する意識と学習ストラテジーに関するアンケート調査を行った。その中でも、特に出牡蠣に対する意識とストラテジーについて、授業での評価基準も視野に入れた上で考察を試みる。

2. 先行研究

まず、冒頭にも述べたように非漢字圏学習者を対象とした漢字学習の意識とストラテジーに関する調査はすでに多くのものが挙げられるが、本論文では大きく分類して学習者を対象に実施されたものと、教師を対象としたものに分けて述べていく。

2. 1 学習者を対象とした調査

はじめに、大北(1995)が英語教育における語彙の学習ストラテジーの調査を日本語の漢字学習に取り入れ、アメリカのハワイ大学にてアンケート項目を用いた量的調査を行い、それをもとに様々な調査が実施されてきた。また、Mori & Shimizu (2007)では、同じくアメリカにて学習者の漢字学習ストラテジーと意識の関連について、アンケート調査を行い、その相関関係についても調べている。さらに、ウラムバヤル(2005)では、モンゴルの大学にて、漢字学習ストラテジーについてアンケート調査を実施し、それを成績上位と下位の学習者と比較している。その結果、「繰り返し書く」の項目は、成

績上位、下位の学習者に共通して多く選択されたが、成績上位者では「グループ分けする」「類推する」「連想する」なども多く選択されていた事が明らかになった。さらに、過去に今回調査を実施する同じラトビア大学でも、すでに漢字学習についての調査が実施されている。大橋(2019)では、「繰り返し書く」戦略が多用される理由を探り、教科書『げんき』を用いた授業にて、第18課までの漢字をすでに学習している2年生を対象に、「部首」、「イメージ」、「由来」、「豆知識」に関連する戦略を取り入れた授業を実施し、その後の学生の戦略の変化について記述形式のアンケートを用いて調査を行った。その結果、ほとんど全員がこれらの学習戦略を取り入れた授業は面白かったと答えたが、12名は「書いて覚える戦略以外は使いたくない」と回答し、その理由として「すでに定着しているから」、「全ての漢字に対し部首やイメージがリンクするわけではない」などの回答が見られたとしている。なお、大橋(2019)はさらに現地人教師へのインタビューとも組み合わされているので、それに関しては、次節にて詳しく触れる。

2. 2 教師を対象とした調査

今度は、教師を対象とした調査についても見てみよう。Shimizu & Green (2002)では、日本語科目を担当している教師の意識と授業で用いる戦略についてアンケート調査を実施している。その調査結果から、教師の漢字学習に対する意識と授業で用いる戦略との関係について論じている。また、濱川(2015)では、初めてデジタル・ツールの使用と漢字学習に関する質問項目を導入し、アンケート調査を実施した。その結果、教師の間ではデジタル・ツールを用いても漢字学習が必要と75%が感じている事が確認されている。

さらに、前述した大橋(2019)では、学生への調査に加え、1年生にて漢字の授業を担当している現地人教師にもインタビュー調査を行っている。漢字を繰り返し書く戦略を授業で使用している理由については、「自分が日本語を勉強した時に、そのような授業だったから」、また「部首」、「イメージ」、「由来」、「豆知識」などの戦略を用いた授業を実施することに対して、「いいとは思いますが、調べ方が分からない。また、準備のための時間もない。」といった回答をしている。このように、特定の授業に限ってみると、特定の学習戦略が選択される理由がより詳しく見えてくる事が分かる。

本研究では、これらの先行研究の結果を踏まえた上で、これらの漢字学習戦略の選択や意識には、授業などでの評価とも関連があるのではないかと考えることにした。先行研究では、大橋(2019)のように特定の授業に直結しているものは少なく、多数の協力者を必要とする量的調査を用いているため、複数の大学や授業の学生が参加しているケースが多く見られる。そのため参加している授業にて用いられている評価ポイントとの関連について触れられているものはほとんどない。また、オンライン授業を経て、漢字学習に対する意識も変化している可能性があるため、デジタル・ツールの使用に関しても分かるアンケート項目を使用する事にした。これらの点をもとに、本研究は濱川(2017)で提唱している、大北(1995)やウラムバヤル(2005)で公開されているアンケート項目をもとに、デジタル・ツールの使用を取り入れ、また英語以外にロシア語などの複数の言語に翻訳されているものを用いる事にした。

3. 背景

本研究で調査を行った対象は、ラトビア大学人文学部アジア研究日本学の学生で、学部にて専門と

して日本語を勉強している学生である。そこでの使用教科書は、3 学期目までが『初級日本語げんき』（以下『げんき』）の二冊を、その後の 4 学期目には『中級日本語カルテット 1』（以下『カルテット』）を使用している。漢字は、各教科書にて提出漢字として扱われているもののみに限定し、『げんき』の二冊では全部で 317 字である。また、『カルテット』では、他の中級教科書と同様に、読みのみのものと、読み及び書きを覚える漢字に分類され、授業内に取り入れた第 5 課までで、222 字の漢字が新出漢字として出て来るが、その中の 75 字が書きも対象となるものだった。

漢字に関する授業は、今回の調査を実施した 2020 年夏入学のクラスでは、1 年目を現地人の教員、2 年目からは発表者が担当した。なお、1 年目は『げんき』の第 16 課まで、3 学期目は第 17 課から始まる形となった。授業形式は、1 学期目、2 学期目の学期末試験は、大学全体で実施されていたコロナ感染対策のため、オンライン形式となった。2021 年 9 月に始まった 2 年目になると、一時はオンラインになった時期もあったが、大半が対面形式となり、筆記試験も全て従来の対面形式で実施する形となった。参加者に関しては、コロナ以前は EU の他国からの留学生も多く参加していたが、この学年に至っては 2020 年夏入学ということもあり、そういった事実は見られず、全員が現地の学校を卒業した学生だった。

4. 調査概要

調査項目は、第 2 章で説明したように、濱川(2017)のものに本発表のために、授業で知らされていた評価基準や、質問票の中で最も多用するものに関する質問を追加したものを使用した。アンケートは全 3 回実施し、1 回目は 3 学期目の冒頭に実施した。これは、3 学期目から対面形式に移行したため、オンライン授業及びオンラインでの期末試験の直後という事になる。2 回目は、3 学期目の学期末試験の後となり、この学年にとっては初めて対面での期末試験、つまり教室でペーパーベースの試験を受けた後に実施した調査となった。この試験の前にも、中間テストとして同様の漢字テストを実施していたが、中には想定していなかった試験結果にならなかった学生もいたかと思われる。3 回目は、4 学期目の学期末試験の後で、対面での学期末試験としては 2 回目だった。しかし、4 学期目から中級教科書に入ることにより、教科書の提出漢字も初級教科書と比べ多くなり、これまで全ての漢字の書きまで試験範囲となっていた初級から、学習方法の切り替えに戸惑っていた学生も多かったと思われる。以下の表に、協力者数及び授業登録者数などを示す。

表 1 調査実施に関する背景

	時期	オンライン・対面形式	人数（登録者数）
1 回目	3 学期目の冒頭	オンラインから対面形式に切り替えた直後	10 人（16 人）
2 回目	3 学期目の学期末試験の後	対面形式での初めての学期末試験	12 人（16 人）
3 回目	4 学期目の学期末試験の後	2 回目の対面形式での学期末試験	10 人（11 人）

5. 調査結果

5. 1 漢字学習への意識

漢字学習の関する意識についてだが、その重要性に関する項目について取り出してみると、以下の表 2 のようになった。なお、濱川(2017)においては、1 が「強く賛成する」、5 が「全然賛成しない」

の5段階となっており、その全体の平均と分散を提示する。

表2 漢字学習の重要性に関する項目

	1回目	2回目	3回目
A12 漢字がわかると、日本・日本社会で生活しやすくなる	M: 1.4 SD: 0.8	M: 1.17 SD: 0.55	M: 1.3 SD: 0.46
A16 漢字がわかれば、様々なもの（小説・まんが・新聞等）が読めるようになる	M: 1.1 SD: 0.3	M: 1.33 SD: 0.85	M: 1.1 SD: 0.3
A27 日本語能力を高めるために、漢字を勉強する必要がある	M: 1.4 SD: 0.92	M: 1.5 SD: 0.87	M: 1.3 SD: 0.46
A30 日本文化を理解するために、漢字をたくさん知る必要がある	M: 1.6 SD: 0.92	M: 2.09 SD: 1.16	M: 1.3 SD: 0.46
A21 パソコンでタイプするので、漢字を勉強する必要があまりない	M: 4.3 SD: 0.78	M: 3.5 SD: 1.12	M: 4.3 SD: 0.46

これらの項目からは、漢字学習に関する重要性は一貫して強く意識されている傾向にあった事が伺える。また、A21のデジタル・ツールを用いるために、漢字を勉強する必要はないという項目に対しても、濱川(2015)と同様に、学生側からも否定的に捉えられている事が分かった。しかし、A21の平均からその意識は、他の漢字学習の重要性ほど強くはなかった事が分かる。

5. 2 漢字の書きについての意識

次に、漢字の書きについての意識についても見てみよう。ここでは、前節と同様に、それに該当する項目を取り上げてみる。それらの項目の数値は以下ようになった。

表3 漢字の書きに対する意識の調査結果

	1回目	2回目	3回目
A01 漢字を書く能力より、漢字を読む能力のほうが大切だ	M: 2.4 SD: 0.92	M: 2.42 SD: 0.95	M: 2.4 SD: 1.02
A10 漢字がきれいに書けると嬉しい	M: 1.6 SD: 0.8	M: 1.67 SD: 1.03	M: 1.9 SD: 1.04
A15 漢字の書き方を勉強するのが楽しい	M: 2.2 SD: 1.08	M: 2.33 SD: 1.43	M: 2.2 SD: 1.08
A20 漢字の書き方や書き順がわからないから困る	M: 2.11 SD: 1.45	M: 1.75 SD: 0.92	M: 2.9 SD: 1.3
A21 パソコンでタイプするので、漢字を勉強する必要があまりない（再掲）	M: 4.3 SD: 0.78	M: 3.5 SD: 1.12	M: 4.3 SD: 0.46
A34 漢字を書き順のとおりには書かなければならない	M: 1.67 SD: 0.67	M: 1.92 SD: 1.11	M: 2.7 SD: 1.42

A37 漢字をきれいに書かなければならない	M: 1.8 SD: 0.75	M: 2.08 SD: 0.95	M: 2.2 SD: 1.17
-----------------------	--------------------	---------------------	--------------------

これらの項目から、多くの項目において平均値が 2.5 までになっていることから、デジタル・ツールを用いる事が多くなっているにも関わらず、漢字を書く事に対し肯定的な意識を持っている事が分かる。また、A10、A34、A37 のように、「きれいに書く」や「筆順」に関する項目では、初級から中級に上がるにつれて、あまり意識されないようになっている。これは新しい漢字を学ぶことや、評価基準にも慣れてきたと捉える事もできる。しかし、A10 にも見られるように、漢字を書くことに対する喜び自体は、あまり時間の経過にて変化は見られない。また、A1 の「漢字を書く能力よりも読む能力の方が大切」と捉える項目を見てみると、あまり顕著な方向性は見られないが、初級、中級教科書の方針にも関わらず、見られたという事が分かる。

5. 3 評価基準に関するアンケート

ここで、濱川(2017)のアンケートに加え、前回の試験にて評価対象として知らされていたものを選択する項目（複数選択可）を筆者が独自に追加した。その結果、それぞれの項目を選択した学生の割合は以下ようになった。

表 4 評価基準として前回の試験にて知らされていたもの（%）（複数回答）

	1. 漢字の書き（手書き）	2. 漢字の書き（デジタル）	3. 漢字語彙の読み	4. 漢字そのものの読み	5. 筆順	6. 部首	7. 漢字語彙の意味	8. 漢字そのものの意味
1 回目	100	50	63	88	25	25	13	75
2 回目	91	0	45	55	0	0	45	45
3 回目	100	0	43	86	0	0	29	57

2 回目と 3 回目に実施されたアンケートは、いずれも筆者が担当する授業の期末試験の後だった。それらの授業で、試験の出題及び評価対象として告知していたものは、これらの項目からは「漢字の書き（手書き）」、「漢字語彙の読み」のみだった。また、中間テストでも期末試験と同様の問題形式が器用され、それも周知されていたため、授業にさえ参加していれば出題形式も慣れていたと思われる。しかし、この質問項目の結果、評価基準としていたものに加え、大半の学生が単漢字に関する項目を選択している事がわかった。また、1 回目は、2 学期目が他の教員が担当していたことと、特に学期末まで試験がオンラインになるか対面形式になるか不明で、どのような出題形式になるかも明確でなかったため、ばらつきが見られたと思われる。

次に、2 回目と 3 回目が実施された直前の授業である、筆者が担当する漢字の授業で用いた中間テストの一例を取り上げる。

- 1) 来年、大学を a) そつぎょうしたら、日本の b) 大学院に入りたい。（『げんき』第 19 課）
- 2) 大学に a) 在学しているおかげで、b) きがるに尊敬している教授と話せる。（『カルテット』第 4 課）

このように、中間テストでは、新しく学んだ文法も含めた問題文を出し、一文につき 2 つの下線部の読みもしくは漢字を書く形式とした。そのため、漢字語彙の意味は評価範囲には入らないが。意味から字形を再生したり、読みを導き出す人にとっては、重要な要素となる可能性がある。しかし、いずれの教科書にも提出漢字とともに漢字語彙も併せて提示されているため、単漢字の読みや意味については試験では問わず、授業でも質問が出ない限り極力触れないようにした。

5. 4 学習ストラテジーに関する調査結果

「学習ストラテジー」の項目では、これも濱川(2017)に倣い、様々な項目に対し 1 を「いつも使う」から 5 の「全然使わない」の 5 段階で評価してもらった。「学習ストラテジー」については、その結果の平均の上位 5 位について見ていく。

表 5 「学習ストラテジー」の項目の平均の上位 5 位

	1 回目	2 回目	3 回目	平均
S35 パソコンやケータイ/スマホのプログラム/ソフトを使って、漢字を練習する	M: 1.4 SD: 0.92	M: 1.25 SD: 0.43	M: 1.4 SD: 1.2	M: 1.35
S29 何度も書いて、漢字を覚える	M: 1.5 SD: 0.92	M: 1.67 SD: 0.94	M: 1.0 SD: 0.0	M: 1.39
S10 漢字がわからないとき、辞書で調べる	M: 1.9 SD: 0.94	M: 1.42 SD: 0.64	M: 1.1 SD: 0.3	M: 1.47
S04 覚えていない/自信がない漢字を、もう一度練習する	M: 1.7 SD: 0.46	M: 1.42 SD: 0.64	M: 1.3 SD: 0.46	M: 1.47
S40 漢字の読み方/振り仮名を書く	M: 1.5 SD: 0.67	M: 1.67 SD: 0.85	M: 1.3 SD: 0.9	M: 1.49
S15 漢字がわからないとき、文脈から意味を想像する	M: 1.6 SD: 0.66	M: 1.83 SD: 0.9	M: 1.5 SD: 0.5	M: 1.64

その結果、字形の再生や読みを繰り返し書く、練習するといった方法が多く選択されている事が分かる。これは、これまでの先行研究と類似した結果といえる。これを含めて、前節で説明した評価ポイントを意識したものが多く選択されている事が分かる。しかし、それ以上に「パソコンやスマホのアプリを使って漢字を練習する」の方が多く選択されている事が分かる。ここで、パソコンやスマホのアプリといっても、様々なものがあり、例えばフラッシュカードや手書き形式など、どのような学習方法が用いられているかは特定できない。この点に関しては後にもう一度触れる。

また、アンケートのみでは、42 項目ある中でどのストラテジーを個々人が最も使うかが見られないため、独自に項目の中から上位 5 位を選択してもらった。その中で、最も頻度の高かったものを以下に示す。

表 6 最も選択された学習ストラテジーの上位 5 位 (括弧内の数字は人数)

	1 回目	2 回目	3 回目
1 位	S29 何度も書いて、漢字を覚える (5)	S35 パソコンやケータイ/スマホのプログラム/ソフトを使って、漢字を練習する (6)	S35 パソコンやケータイ/スマホのプログラム/ソフトを使って、漢字を練習する (6)
2 位	S5 書き順に注意して練習する (4)	S29 何度も書いて、漢字を覚える (5)	S10 漢字がわからないとき、辞書で調べる (5)
3 位	S11 漢字だけでなく、ことば・熟語で覚える (4)	S26 単語カードやフラッシュカードを使って、何度も練習する (4)	S29 何度も書いて、漢字を覚える (5)
4 位	S35 パソコンやケータイ/スマホのプログラム/ソフトを使って、漢字を練習する (4)	S33 日本語のテレビ・本・雑誌・歌などを使って、漢字を練習する (4)	S4 覚えていない/自信がない漢字を、もう一度練習する (4)
5 位	S26 単語カードやフラッシュカードを使って、何度も練習する (3)	S1 新しく習った漢字やことば・熟語を書いてリストにする (3)	S26 単語カードやフラッシュカードを使って、何度も練習する (4)

この表を見てみると、S29 の「繰り返し書く」と S35 の「パソコン・スマホのプログラム (アプリ) を使って練習する」が最も多く、これらも中級の 3 回目においても各々の上位 2 位に集中していた。また、それ以外の結果を見ても、各々の学生にとって、この 2 つの項目以外にも、何らかの反復練習に関わるものが頻繁に使用されている事が分かる。もしかすると、これらのストラテジーは、学生にとって最も印象に残るもの、いわゆる「漢字の勉強」としての行為として強く意識されるものであり、この裏で他のものも使用されている可能性は否定できない。それでは、今度は下位も見てみよう。

表 7 最も選択されなかった学習ストラテジー

	1 回目	2 回目	3 回目
S7 同じ部首をもつ漢字をグループに分けて覚える (例: にんべん「伝・作・住」)	M: 3.9 SD: 1.04	M: 4.17 SD: 1.28	M: 4.7 SD: 0.64
S3 同じ音符をもつ漢字をグループに分けて覚える (例: コウ「校・郊・効」)	M: 3.9 SD: 1.04	M: 4.25 SD: 1.09	M: 4.5 SD: 0.67
S13 同じ読み方の漢字をグループに分けて覚える (例: カイ「会、回、海」)	M: 3.6 SD: 1.11	M: 3.67 SD: 1.31	M: 3.9 SD: 1.3
S19 漢字を初めて見たところ (ページ) を記憶する	M: 2.9 SD: 1.45	M: 4.08 SD: 1.19	M: 3.8 SD: 1.17
S25 新出漢字とアルファベット/母語の文字の形を結びつけて連想する	M: 3.4 SD: 1.5	M: 3.08 SD: 1.66	M: 3.9 SD: 1.3
(S2 意味のグループを作って覚える (例: 曜日「月・火・水・木・金・土・日」))	M: 2.3 SD: 0.64	M: 2.75 SD: 1.3	M: 4.0 SD: 1.41

この表から、「グループに分けて覚える」は部首・音符・読みに関してもあまり使われていない実態が分かる。しかし、この結果には授業内で部首や音符について深く触れていない事にも起因すると想定できる。これは、特に初級の教科書の内容では、あまりこういったグルーピングが可能な漢字が少なかった事も挙げられる。また、S25 のアルファベット・母語の文字の形と結びつけるといった項目も低かったが、これと類似する S30 の「日本語の文字と結びつけて連想する」といった項目では、平均値が1回目では3.56であったのに対し、2回目では2.58、3回目では2.2と、教科書の提出漢字のレベルが上がってくると、より使用されていく傾向が見られた。これは、パーツなどに分けて覚えるストラテジーがより用いられている事が分かる。これらの調査結果から、次章にて考察を試みる。

6. 考察

本研究の調査結果から、漢字学習の意識に関しては、まずは漢字の書きに対し肯定的な意識を持つ人が多く、またデジタル・ツールがあるため、漢字学習が必要でないとはあまり学習者は考えていない事が確認された。これは、今回調査対象としたのが、日本語を専門として学ぶ学生であった事も大きく関係していよう。デジタル・ツールが一般的に利用されるようになり、あまり日本語を勉強しなくてもデジタル上で漢字を書く事が容易になってしまった現代では、日本語を大学で専攻する意義を手書きできる部分に求めている可能性も考えられる。この点に関しては、全学対象の外国語科目として日本語を勉強している学生などと比較することで確認していく事ができるだろう。さらに、今回の項目はデジタル・ツールと漢字学習の必要性に関連するものは、これひとつであったため、漢字を手書きに対する必要性や、ツールを用いたとしても漢字学習の必要性を感じる点など、さらなる調査の可能性が見られる。

また、学習ストラテジーにおいても反復練習に関するものが多く選択され、その中でも「繰り返し書く」が多く選択されていた。これは、特に筆者の授業では、「漢字の書き（手書き）」を評価対象としていたため、それと合致するものが見られる。つまり、学生は中間テストや期末試験対策として「繰り返し書く」を学習方法として選択していた可能性も考えられる。この点に関しては、例えば選択式のみで実施される日本語能力検定試験の対策を目的とした授業では、特に新出漢字を学ぶ時には学習者にどのような学習ストラテジーが多用されているのか、興味深いものがある。

また、「スマホ・パソコンを使って練習する」も、同じ問題を繰り返し練習しているものと想像できる。後に、漢字学習の相談に来た学生の一人に使用しているアプリを見せてもらったところ、書きでは手書き・単漢字で練習するもの、つまり筆順を間違えると先に進めないしくみのもの、また読みに関しては単漢字の読みや、その意味を問うもので練習していることが分かった。これは、5.3の評価基準についてのアンケートの結果と合致するものである。学生に理由を尋ねたところ、「みんなが使っているから、効果があると言っているから」という説明があった。そこで、もう一度試験内容とその評価基準について説明したところ、「今までこの方法でやってきて、うまくいっているから」という理由で変えるつもりはないと言っていた。これは、先行研究の大橋(2019)と同じ傾向で、すでに定着している学習ストラテジーを変える事は難しいと学習者が回答している点と類似している。

このような結果から、対面形式での期末試験や何らかの検定試験のように、制限時間内に漢字の字形の再生や読みを解答しなければならないものが必須となっている場合、「繰り返し書く」などの反復練習を除外してみる事で、漢字学習ストラテジーの使用に対し新たな傾向が見られる可能性がある。また、授業外で予習、復習として用いるストラテジー、授業内で漢字を用いる活動などを分けて捉え

る事で、反復練習以外のストラテジーも同時に使っていく事ができるのではないかな。

7. まとめ

本研究では、オンライン授業から対面への切り替え後の、漢字学習に対する意識と学習ストラテジーについて、アンケートを用いて 3 回調査を行った。また、今回用いた濱川(2019)のアンケートに加え、評価基準に関する項目、またストラテジーについて上位 5 位を回答する項目を追加し、特定の授業で実施することで、試験対策として反復練習を頻繁に用いている可能性がある事が見いだせた。さらに、オンライン授業を経験しデジタル・ツールに触れる機会が多くなったにも関わらず、漢字学習に対する必要性を学生自身がまだ意識している事がわかった。

しかし、今回はアンケート実施しなかった事もあり、インタビューなどで詳細を確認する事ができなかった。今後は、考察で述べたように日本語能力検定試験の対策講座で、学習者独自で用いている学習ストラテジーと比較する事で、また新しい知見が得られるのではないかな。

漢字学習への意識やストラテジーに対する調査は、すでに多く実施されてきたが、今後のデジタル・ツールの発展などから、また大きく学習者の意識や学習ストラテジーが変化していく事が考えられる。それによって、カリキュラムなどの変更の必要性も出てくると思われるため、より学習者の全体像を記述することのできる方法で、漢字学習に対する意識や学習ストラテジーの傾向を調査していきたい。

参考文献

- ウラムバヤル・ツェツェグドラム (2005) 「モンゴル国立科学技術大学の学生が使用している漢字学習ストラテジー—漢字学習シラバスの作成に向けて」 『日本言語文化論集』 第 1 号, 201-228.
- 大北葉子 (1995) 「漢字学習ストラテジーと学生の漢字学習に対する信念」 『世界の日本語教育』 第 5 号, 109-124.
- 大橋幸博 (2019) 「ラトビア人日本語学習者の漢字学習ストラテジーの現状と問題点—ラトビア大学における調査から—」 『ヨーロッパ日本語教育』 24, 329-338.
- 濱川祐紀代 (2015) 「日本語非母語話者教師の漢字学習に関する意識—非漢字系若手教師への質問紙調査より—」 『日本語教育方法研究会誌』 22 巻 1 号, 18-19.
- 濱川祐紀代 (2017) 「非漢字系日本語学習のための漢字学習の方法と意識に関する質問紙調査—調査の手順と質問票の共有—」 『JSL 漢字学習研究会誌』 第 9 号, 28-61.
- Mori, Y. & Shimizu, H. (2007) Japanese Language Students' Attitudes Towards Kanji and Their Perceptions on Kanji Learning Strategies. *Foreign Language Annals*, 40 (3), 472-490.
- Shimizu, H. & Green, K. E. (2002) Japanese Language Educator's Strategies for and Attitudes towards Teaching Kanji. *The Modern Language Journal*, 86 (2), 227-241.

教科書

- 坂野永理ほか (2011) 『初級日本語げんき I・II』 第 2 版, ジャパンタイムズ
- 坂本正ほか (2019) 『4 技能で広がる中級日本語カルテット I』 ジャパンタイムズ